

出題のねらい

一般中期の国語は文学的文章と古文から一題ずつ出題されます。

㊦が文学的文章で、二十世紀で最も偉大なチェロ奏者として知られる、パブロ・カザルスの自伝「喜びと悲しみ」から採りました。カザルスの若い頃の苦労が始まる部分です。カザルスのほか、音楽学校の教師や学生たち、それから母親が主要な登場人物です。彼らの言動から、それぞれの性格、そのときの心情が生きて生きてあふれてくる。それを読み取ってもらおう、と思って選びました。文章自体は読みやすく、難易度はさほど高くないはずですが、それだけに、漢字や文学史で差をつけたいところです。

㊧の古文は『義経記』です。室町時代に書かれた、源義経（よしつね）とその家来を中心とした軍記物語です。今回は、武蔵坊弁慶（むさしほうべんけい）が、義経と出会って家来になる場面の前半から出題しました。書かれている内容と登場人物の心情を読み取ることがねらいです。単語の読みや語句の意味、あるいは、文章の現代語訳、人物の説明など、日本の文化を知るための基礎知識を身につけ、それを前後の文脈と合わせながら内容把握する力が試されました。

㊨

【解答】(50点)

問一	a 委細	b 窮	c 血眼	d 激務	
	e 一瞬				(2点×5)
問二	翌日すぐ、				(5点)
問三	ききたくて				(5点)
問四	ウ				(4点)
問五	ウ				(4点)
問六	ときに楽器				(4点)
問七	最初はカザルスのことを馬鹿にしていたが、 彼が素晴らしい演奏をしたので驚いてしまい、 いまさら称賛もできず戸惑っている。				(6点)
問八	ア				(4点)
問九	イ				(4点)
問十	母は笑って				(4点)

【解説】

問一 漢字がいつも合否を分けます。常用漢字で、しかもよく使われる用語しか出題されません。日ごろから標準的なレベルの問題集で練習して、五問あるなら四問は正解したいところです。今回は「委細」と

「窮」が非常に難しかったようです。だから、せめて三問は正解してください。

問二 音楽学校とパリで、場面も話題も大きく変わることに気づけば容易でしょう。しかし、思ったほど正解の出なかった問題です。みなさん、考えすぎたのかもしれない。本学の入試問題は、ひねった問題を出すことはほとんど無いので、素直に考えてください。

問三 正解は「ききたくても、ききたくなくても、彼はきくことになるのだ」の部分です。どんな相手だろうと、自分の演奏に釘付けにしてしまう自信がある。だから、「彼はきくことになるのだ」と予言できたのです。

問四 比喩が出題される場合はたいてい直喩で、たまに隠喩です。しかし、今回は換喩の問題でした。エは提喩です。換喩も提喩も知らない人が多いですが、基本的な比喩ですよ。なお、イは比喩が使われていません。

問五 教授はぜんぜんカザルスを「素晴らしい」とは思っていないのに、そう言ってますね。すなわち、皮肉を言ったわけです。問三、問四、問五は正答率が高かったです。確実に正解したい問題です。

問六 これは難しかったでしょう。発言中にハッキリと書かれていなくても、その場の状況を推測できる場合がある、という問題です。正解は「ときに楽器はなにを使うのかね」の部分です。もし、カザルスが楽器を手にしていたら、こんな質問はしませんね。

問七 六〇字程度の記述を要求される問題は必ず出ます。練習しておきましょう。問題自体は難しいものではありません。その簡単な答を正確に書けるか、という問題です。コツは「質問されたことに答える」です。今回は、「どのように気持ちが変わったか」、「カザルスの演奏がどのようなものだったか」この二つですね。ちなみに、前者で3点、後者で3点、計6点の高得点問題です。また、字数は五十五字以上を目標にしましょう。何も書かないよりはましですが、字数が少ないと減点されます。今回は4点以上を取れている人が多く、合格するにはそれで充分だと思えます。

問八 エを選んでしまう人が多かった問題です。傍線部の発言に「おわび」があるでしょうか。無い。つまり間違いです。正確な読解力を養いましょう。

問九 簡単な文学史の問題もできるだけ出すようにしています。しかし、ほとんど正解者がありませんでした。どれも超メジャーな作家の代表作で、ウは大正時代、エは昭和時代が活躍の中心だった作家です。この間違いだけはしないように。アカイは迷うかもしれませんが、アには明治天皇が亡くなる場面がありますね。したがって大正文学です。教科書に載っていませんでしたか？

問十 「母親の様子が具体的にうかがえる段落」の「具体的」が重要です。髪を失っても、「気にすることはないよ」「いいんだよ」「すぐもとどおりになるよ」と楽天的な発言があって、これはたしかに「具体的」ですね。



【現代語訳】

こうして冬にもなったが、ある時弁慶が思ったことは、「人の貴重な宝物は千揃えて持つものだから、奥州の秀衡は名馬千疋、肥後の国の菊池は鎧を千領、肥前松浦の大夫は胡千腰に弓千張、このように貴重な宝物を千揃えて持っているそうなのに、この弁慶は代金がないので、買って持つことも出来ず、知人がないので与えられるということもない。よくよく考えた結果、弁慶は夜に入って京の町中に佇んで、人が持っているような太刀を千振り奪い取って、重宝にしたい」と思って、人の太刀を取ってまわった。

しばらくすると、「最近京都の町中に身長が約三メートルもある天狗が飛び回って、人の太刀を取る」と人々が噂をした。こうしてこの年も暮れたので、翌年の五月の末か六月の初めまでに、弁慶は多くの太刀を取った。その太刀は、樋口烏丸にある御堂の天井に置いた。数えてみたところ、九百九十九取っていた。

六月十七日、弁慶は五条の天神社に参詣して、夜になると共に祈念したことは、「今夜の御利益に、この弁慶に立派な太刀をお与え下さい」と祈誓して、夜が更けると、天神の社の御前に立ち出て、南へ向かって行って、人の家の築地の側に佇んで、天神へ参詣する人の中に、よい太刀を持っている人はいないかと、待ち構えていた。

夜明け前になって、堀川小路を南に下って行くと、気の魅かれる面白い笛の音が聞こえた。弁慶はこの笛の音を聞いて、「面白いなあ。ただ今夜更けて天神へ参詣する人が吹く笛であろう。法師であろうか、俗人であろうか、ああ良いような太刀を持っていてくれ、取ってやろう」と思って、笛の音が近づいたので、身を屈めて見てみると、若い人が白い直垂に胸板を銀で白く光らせた腹巻きを着、黄金作りの太刀で想像もつかない立派な太刀を腰に帯びておられた。

弁慶はこれを見て、「ああ見事な太刀だなあ。なんとしても、取りたいものだなあ」と思って、待ち受けている所に、やってこられたのは、後に聞くと、恐ろしい人でいらっしまったのだ。しかし、弁慶はどうしてそれがわかるだろうか、いやわかるはずはない。御曹司もまた身を隠していらっしまったので、油断なく周囲に気を配っておられた。棕の木の下をご覧になると、異様な姿をした法師が、大きな太刀を脇に挟んで立っていたのをご覧になって、「あいつもただ者ではない。このごろ京都で人の太刀を奪い取る者は、あいつであるよ」とお思いになったので、少しもひるまず向かって行かれた。

弁慶も少しも臆さず、あれほど勇猛そうな人の太刀さえも、奪い取ったのに、まして、この程度のやせ男など、近寄って太刀を強要したらその声にも俺の姿にも怖じ気づいて太刀を差し出すだろう。もし強要しても太刀をくれ

一般入試／国語(中期)

ないならば、突き倒して奪い取ってやろうと心の用意をして、御曹司の前に現れて申し上げたことは、「ただ今、息をひそめて、敵を待ち受けていたところに、胡散臭い人が武装してお通りになることこそ怪しい。たやすくお通し申し上げることは出来ません。それがいやなら、その太刀をこちらに差し出して通られよ」と申し上げると、御曹司はこれをお聞きになって、「最近そのような愚か者がいるとは聞いているぞ。たやすく与えることは出来ない。もし欲しいのなら近寄って取れ」とおっしゃられた。

【解 答】(50点)

問一	a ちょうほう b おうしゅう c きわ	(2点×3)
問二	①エ ②ウ ③エ ④ウ	(3点×4)
問三	A ウ D ア	(4点×2)
問四	弁慶の、太刀が素晴らしいと感嘆する心情。	(5点)
問五	オ	(2点)
問六	エ	(2点)
問七	E もし太刀をくれないならば、突き倒して奪い取ってやろう。 F たやすくお通し申し上げることはできません。	(5点) (7点)
問八	怪しからぬ法師の、大太刀脇挟みて立居たりける	(3点)

【解 説】

問一 単語の読みの問題です。a「重宝」は、「貴重」の「重」を「ちょう」と読むことに気づけば、「ちょうほう」と読めました。b「奥州」は下の藤原秀衡からも推測できます。c「際」は「さい」と読む解答が多く見られましたが、『源氏物語』冒頭の「いとやむごとなき際にはあらぬが」や、「いまわの際」など、「きわ」と読むことが古典では多いですね。

問二 文脈も考慮した語句の意味を答える問題です。①「代り」はあとの、「買ひでも持たず」から「代金」を選びます。②「詮ずる所」は「所詮」という二字熟語としても使いますが、「よく考えると」の意ですね。③「男やらん」の「やらん」は「にやあらん」の短縮形で、「であろうか」の意味です。④「をこ」は「愚か」。これは重要古語ですね。

問三 文の解釈として最も適当なものを選ぶ問題です。A「帯刀」という二字熟語が現在でもあるように、刀は「帯(お)び」る、あるいは、「帯(は)く」ものです。「帯かれたり」の「れ」は主語が御曹司(=義経)なので、尊敬の助動詞です。D「放た

れず」の「れ」も、主語は御曹司(=義経)ですから、可能ではなく尊敬の助動詞です。

問四 心情説明問題です。「あはれ」は形容動詞「あはれなり」の語幹ですので、「ああ、すばらしい」「ああ、気の毒だ」など、様々な意味になりますが、ここでは後に「太刀や」とありますから、素晴らしい太刀を見かけて感心していることを把握したいです。感心しているのは、「弁慶」ですね。

問五 登場人物の説明の問題です。問題文に()を付して挿入句であることを示しましたから、正解する人は多かったです。

問六 語を空欄に補充する問題です。直後に「まして」がありますから、ここは「だに」を選択します。

問七 現代語訳の問題です。Eは「くれずは」の「ずは」は、打消+仮定の表現ですので、「もし～ないならば」と訳します。また、「奪ひ取らん」の「ん」は意志の助動詞なので、「～しよう」「～してやろう」等と訳します。Fは、「左右なし」という形容詞が「迷わない」「躊躇しない」の意です。また、「通し参らせ候ふ」は、「参らす」は謙譲の補助動詞、「候ふ」は丁寧の補助動詞です。最後の「まじ」はここでは不可能の意味の助動詞ですから、「できない」と訳します。

問八 弁慶の姿・有様ですから、「怪しからぬ法師」のことを説明している部分を抜き出してもらいました。誤答は「丈一丈ばかりなる天狗の歩きて、人の太刀を取る」です。これは噂であって、弁慶は身長「3m」でもなければ、「天狗」でもありませんね。